

令和 6 年 9 月 10 日現在

機関番号：22302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00764

研究課題名(和文) 大学入学共通テストの英語に加えて、4技能試験を課す必要があるのか

研究課題名(英文) Should we measure the four skills of English in addition to the University Entrance Common Test?

研究代表者

神谷 信廣 (Kamiya, Nobuhiro)

群馬県立女子大学・国際コミュニケーション学部・教授

研究者番号：70631795

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、大学入学共通テスト(以下、共通テスト)の英語のテストと、4技能(リスニング、リーディング、スピーキング、ライティング)を測定する市販の英語テストであるTOEIC Bridgeの2つの英語テストのスコアがどの程度相関しているかを調べました。さらに、2つのテストが測定している英語力が、どの程度重複しているかを検証しました。その結果、2つのテストのスコアの間には、中程度の相関があることが分かりました。しかし共通テストが測定している英語力は、主に受容スキルであるリーディングとリスニングであり、産出スキルであるスピーキングとライティングは、2次試験などで別途測定する必要性が示されました。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、4技能を測定している他の英語のテスト(TOEIC Bridge)を用いて、共通テストの英語のテストが、英語のどのようなスキルを測定しているのかを統計的に検証した、おそらく初めての研究です。今回の研究結果により、共通テストの英語のテストは、主に生徒のリーディングとリスニングの力を測定していることが明らかになりました。よって、生徒の英語力を総合的に測定するためには、共通テストに加えて、スピーキングやライティングのスキルも評価する必要性が明らかになりました。このことから、現在一部の大学で実施されているように、2次試験において、独自のスピーキングテストを課すことの妥当性が示されました。

研究成果の概要(英文)：In this study, we examined the extent to which scores on two English language tests correlated: the Common Test for University Admissions (hereafter referred to as "Common Test") and TOEIC Bridge, a commercially available English language test that measures four skills (listening, reading, speaking, and writing). We also examined the extent to which the English language skills measured by the two tests overlapped. The results showed that there was a moderate correlation between the two test scores. However, the Common Test measures mainly the receptive skills of reading and listening, while the productive skills of speaking and writing need to be measured separately, such as in the secondary test.

研究分野：第二言語学

キーワード：共通テスト TOEIC Bridge

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 当初、文部科学省から、大学入試センター試験 (以下、センター試験)を大学入学共通テスト (以下、共通テスト)に変更するタイミングで、英語の試験を4技能を測定する民間試験に置き換える案が提示された。
- (2) これを受けて、2015年度から2017年度にかけて、筆者自身が科研費を用いて行った、センター試験とTOEFL Junior Comprehensiveという英語の4技能試験を対象とした研究により、別途スピーキング力とライティング力を測定しなくても、センター試験の「筆記」だけで、生徒の「英語力」の80%を測定できることが明らかとなった。
- (3) その後、センター試験廃止後は、共通テストと民間試験を数年間併用し、その後民間試験に一本化する案に変更された。
- (4) 「共通テストが受容スキルであるリスニングとリーディング」、「民間試験が産出スキルであるスピーキングとライティング」を測定するという前提のもとに、共通テストは、センター試験から以下のような変更が加えられた上で実施された。

名称が「筆記」から「リーディング」となり、よりリーディング力「のみ」を測定する傾向が強くなった。

読解する英文の量が増えたため、これまで以上にリーディング力を測る傾向が強まった。

「発音・アクセント」と「文法・語法」の問題がなくなったため、「知識・理解」で取れる点数がなくなった。

配点が、「筆記」が200点、「リスニング」が50点だったものが、「リーディング」と「リスニング」の、それぞれが100点ずつとなった。

- (5) これらの変更点のため、共通テストにおいては、センター試験の時とは異なる「英語力」の測定している可能性が指摘されたが、それを検証した研究はなかった。

2. 研究の目的

- (1) 英語の4技能試験であるTOEIC Bridgeと共通テストの点数の間に、どの程度相関があるのかを明らかにする。
- (2) TOEIC Bridgeを用いて、共通テストがどのような英語力を測定しているのかを明らかにして、その結果をセンター試験の結果と比較する。
- (3) 共通テストに加えて、民間試験、あるいは大学の2次試験において、スピーキング力とライティング力を別途測定する必要があるのかどうかを明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 合計で128名が参加した。内訳は以下の通り。
 - (ア) 報告者が所属する大学1年生が93名
 - (イ) 群馬県内の3つの高校3年生が18名
 - (ウ) 群馬県内の2つの中等教育学校6年生が17名
- (2) 参加者は1月に通常の共通テストを受験し、成績通知を研究者に見せた。
- (3) それに加えて参加者はTOEIC Bridgeを、3月か5月に筆者が所属する大学で受験した。ただし1年目のみ、コロナ禍によりオンライン受験となった。
- (4) 共通テストとTOEIC Bridgeのスキル別と合計点数の関係性を、SPSSというソフトを用いて、相関分析により調べた。
- (5) 共通テストとTOEIC Bridgeが測定している英語の力を調べるため、AMOSというソフトを用いて、確認的因子分析により、3つのモデル(単一モデル、スキルモデル、テストモデル)の中で、全ての点数の関係性を最も的確に表しているものを選んだ。

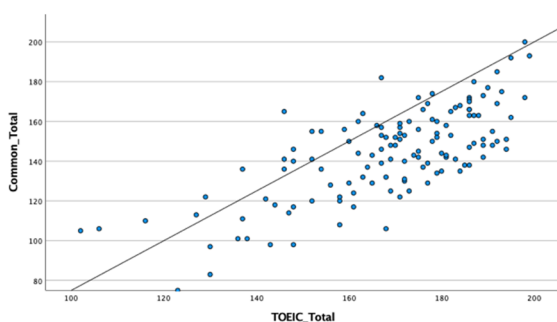
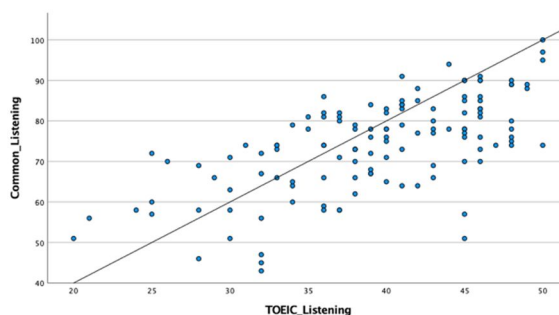
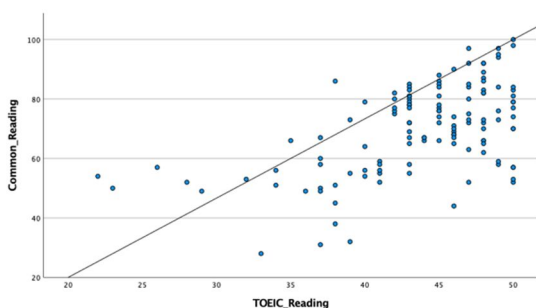
4. 研究成果

共通テストと TOEIC Bridge の点数の記述統計は以下の通りである。参加者にとって、TOEIC Bridge、特にライティングはやや簡単だったようで、高い平均点が見られた。

	共通テスト			TOEIC Bridge				合計
	リーディング	リスニング	合計	リスニング	リーディング	スピーキング	ライティング	
満点	100	100	200	50	50	50	50	200
平均点	70.05	74.13	144.17	39.30	43.70	40.05	45.69	168.73
標準偏差	14.76	11.63	22.99	6.77	5.69	7.63	4.40	19.75
最大値	100	100	200	50	50	50	50	199
最小値	28	43	75	20	22	15	27	102
歪度	-.39	-.46	-.39	-.59	-1.48	-1.13	-1.62	-.99
尖度	-.11	-.04	.23	-.15	2.64	1.11	2.78	.91

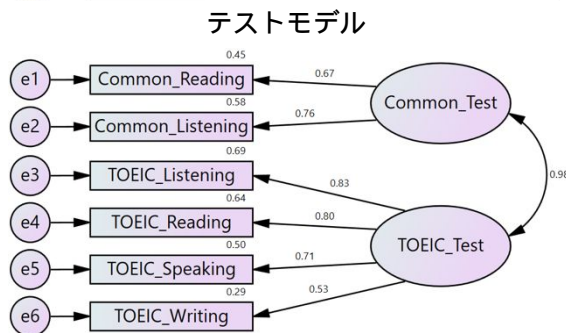
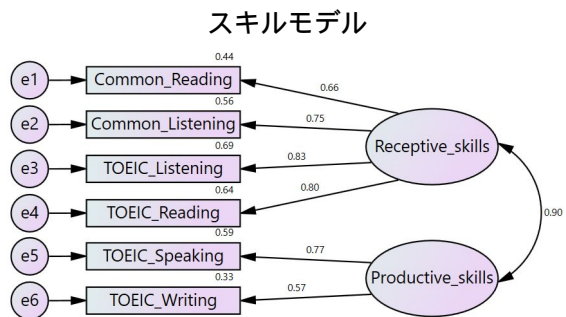
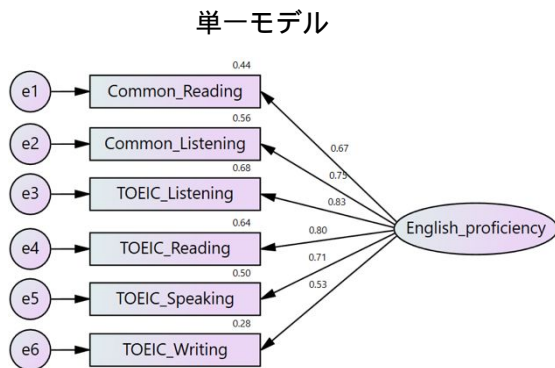
共通テストと TOEIC Bridge の点数の相関は以下の通りである。リーディング同士は.548、リスニング同士は.646、合計点数は.732 と、ある程度高い相関係数が見られた。合計点数に関しては、共通テストが 2 技能、TOEIC Bridge が 4 技能の合計点数であるにもかかわらず、最も高い相関係数となった。なお全て $p < .001$ であった。

		共通テスト		TOEIC Bridge			合計	
		リスニング	合計	リスニング	リーディング	スピーキング		ライティング
共通テスト	リーディング	.512	.901	.492	.548	.540	.613	
	リスニング	-	.834	.646	.573	.514	.668	
	合計	-	-	.643	.642	.606	.414	.732
TOEIC Bridge	リスニング	-	-	-	.687	.582	.395	.854
	リーディング	-	-	-	-	.519	.462	.827
	スピーキング	-	-	-	-	-	.440	.833
	ライティング	-	-	-	-	-	-	.661



上2つと左のグラフは、リーディング、リスニング、合計点数同士の散布図である。縦軸の Common は共通テスト、横軸の TOEIC は TOEIC Bridge を示す。

全体的に両者のテストの点数の間にはある程度高い相関が見られるが、先行研究における、センター試験と TOEFL Junior Comprehensive の点数の間の相関に比べると、相関係数は低くなった。



次に共通テストと TOEIC Bridge の点数について、上 2 つと左の 3 つのモデルを検証した。統計的な結果は、以下の表の通りである。

検証の結果、この 2 つのテストの点数の関係を最も適切に表しているのは、スキルモデルであると判断した。つまり、共通テストと TOEIC Bridge のリーディングとリスニングが受容スキル、TOEIC Bridge のスピーキングとライティングが産出スキルを測定しており、かつこの 2 つのスキルには高い相関がある、ということを示す。

	χ^2	df	RMSEA [CI]	SRMR	CFI	NFI	TLI
単一	13.252	9	.061 [0, .126]	.032	.986	.960	.977
スキル	11.476	8	.058 [0, .128]	.029	.989	.965	.979
テスト	13.091	8	.071 [0, .137]	.032	.984	.960	.969

以上の結果から、以下のような結論が導き出される。

- (1) センター試験の「筆記」が、受験者の総合的な英語力を測定していたのに比して、共通テストは、より受容スキル、具体的には「リーディング力」と「リスニング力」を測定している傾向が強く、産出スキルである「スピーキング力」と「ライティング力」を測定している度合いが少ない。
- (2) 共通テストは、生徒の全般的な英語力を測定していない傾向が強いため、2次試験において、別途スピーキングやライティングの評価を行うことが望ましい。
- (3) 現在、いくつかの大学で独自にスピーキングテストを開発、実施しており、今後このような動きが増えることが望ましい。

なお最終年度には、テストングの専門家である 4 名の先生方を招聘して、「英語教育学シンポジウム～大学入学試験における英語 4 技能の測定～」と題したオンラインシンポジウムを開いた。そこで報告者自身も、本研究と先行研究をまとめた「センター試験と共通テストの研究から考える英語 4 技能の測定」と題した発表を行い、主に英語の先生方に研究結果を還元させていただいた。参加登録者数は 83 名だった。内容とご参加いただいた先生方のお名前とご所属は以下の通りである。

お名前	ご所属	タイトル
Paula Winke	ミシガン州立大学	講演「How Can We Measure Four Skills of Second Language?」
周 育佳	東京外国語大学	講演「東京外国語大学の入試の取り組み」 パネルディスカッション 「英語 4 技能を測定することの意義と課題」
小泉 利恵	筑波大学	パネルディスカッション
印南 洋	中央大学	「英語 4 技能を測定することの意義と課題」

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kamiya Nobuhiro	4. 巻 14
2. 論文標題 Is the Common Test for University Admissions in Japan enough to measure students' general English proficiency? The case of the TOEIC Bridge	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Language Testing in Asia	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1186/s40468-024-00272-6	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 Kamiya Nobuhiro
2. 発表標題 Should We Measure Speaking and Writing Skills in Addition to the Common Test for University Admissions? In the Case of the TOEIC Bridge
3. 学会等名 第48回 全国英語教育学会 香川研究大会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	Winke Paula (Winke Paula)		
研究協力者	小泉 利恵 (Koizumi Rie)		
研究協力者	印南 洋 (In'nami Yo)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 英語教育学シンポジウム-大学入学試験における英語4技能の測定-	開催年 2023年～2023年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------